

氏名（本籍）	牛山聰子（神奈川県）
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第15号
学位授与年月日	昭和54年10月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	幼児の社会的行動の選択と学習を規定する要因に関する研究
主査	筑波大学教授 教育学博士 高野清純
副査	筑波大学教授 教育学博士 相川高雄
副査	筑波大学教授 文学博士 金子隆芳
副査	筑波大学教授 松田岩男
副査	筑波大学助教授 佐々木俊介

論文の要旨

行動それ自体の結果をもっとも客観的に判断し得る「ジャンケン」と、結果の判断に主観的な基準をもっとも入りやすい「協同行動」について、次の(1)から(5)までの仮説を検証することを目的とする。

- (1) 幼児が他の幼児との関係において選択する社会的行動を規定するものは、社会的行動それ自体の結果、つまり、その社会的行動それ自体のもつ強化としての特性である。
- (2) 社会的行動の結果は、部分強化としての役割を演じる。したがって、その社会的行動の消去抵抗は高く、比較的長期にわたって維持され得る。
- (3) 幼児の社会的行動の学習は、モデルの行動とその結果についての幼児の観察によって促進され得る。
- (4) 幼児の行なった社会的行動の結果が正である場合には、その後その行動の選択される確率は高くなり、その行動の遂行は促進される。逆に、その結果が負である場合には、選択される確率は低下し、遂行は抑制される。
- (5) モデルの社会的行動に対して、他者から与えられる賞あるいは罰は、幼児の同様な行動の学習、遂行を促進する。

基本的には、モデリング手続きが用いられた。つまり、モデルの行動の結果を操作し、それが幼

児の行動の学習に及ぼす影響が測定された。被験児はすべて3歳から6歳までの保育園児ならびに幼稚園児である。

「ジャンケン」に関する実験（第1実験～第5実験）では、ジャンケンによって、また、「協同行動」に関する実験（第6実験～第8実験）では、協同行動によって、それぞれ特定の結果を得るモデルが、8ミリ映画によって提示された。自発的遂行は、幼児2人だけの場面で、ジャンケンあるいは協同行動が選択されるかいなかを観察された。自発的遂行の結果がその後の行動の選択に及ぼす影響をみるために、モデルの提示→自発的遂行の測定という手続きが繰り返された。また、自発的遂行の測定だけを数回行なうことによって、モデルの影響の強度が検討された。

実験はすべて、観察室を備えた遊戯室で行なわれた。

「ジャンケン」に関する実験によって、次の点が明らかにされた。

- (1) 幼児のジャンケンの選択を規定するのは、ジャンケンの有する部分強化の特性であり、その学習および遂行を促す主な要因は、ジャンケンそれ自体のもつ強化特性であり、ジャンケンそれ自体がもたらす正の結果である。
 - (2) ジャンケンが本来もっている部分強化の特性によって、一たん獲得されたジャンケンは維持され続ける。
 - (3) 幼児のジャンケン行動の学習は、モデルのジャンケンとそれがもたらす正の結果を観察することによって促進され得る。しかし、ジャンケンのやり方やルールについて未知の幼児に及ぼすモデルの影響には限界がある。
 - (4) 幼児が他の幼児と自発的に行なったジャンケンから、正の結果が得られた場合には、その後、ジャンケンの選択される確率は高まり、ジャンケンの遂行は促進される。反対に、続けて負の結果を経験する場合には、ジャンケンを選択する確率は減少し、その遂行は抑制される。
 - (5) モデルのジャンケンに対して与えられた言語による賞は、それを観察した幼児のジャンケンの選択、学習、遂行のいずれをも促進することがなかった。
 - (6) ジャンケンは、幼児の場合、女兒および力の弱い男児によって選択される傾向が強い。
- 協同行動に関する実験結果は、次のようなものである。

- (1) 幼児の協同行動の選択を規定し、その学習および遂行を促す主な要因は、「協同行動による結果が単独行動による場合より望ましい」という強化としての特性である。
- (2) 協同行動の結果は、部分強化の特性を有する。そのために、協同行動は維持される。
- (3) モデルの協同行動に対して与えられる賞罰は、協同行動のもたらす正の結果と矛盾しない形で与えられる場合には、それを観察した幼児の協同行動の選択、学習、遂行を促進する。
- (4) 幼児が自発的に遂行した協同行動の結果が正である場合には、その後協同行動の選択される確率は高まり、その遂行は促進される。逆に、協同行動の結果が負である場合には、協同行動の選択される確率は低下し、その遂行は抑制される。
- (5) 社会的場面によって、男児と女兒の間には、協同行動の選択に差異が認められる。

以上の結果から、本研究の仮説は検証され得たといえよう。このことは、本研究の基本的な考え

方、すなわち、①幼児の行動それ自体の結果、②行動結果に関してモデルの提供する情報が、新しい行動の獲得にあたって重要であるということを実証したということができると考えられる。

審 査 の 要 旨

現在、モデリングについての研究は、国の内外を問わず盛んに行なわれ、行動の学習における効果が、一般に認められている。しかし、なぜ、モデリングが行動の学習に有効であるかということについては、二、三の考え方も提出されてはいるが、まだほとんど解明されているとはいえない。

本論文は、「ジャンケン」という比較的単純な幼児の社会的行動と、積木による協同製作という比較的複雑な社会的行動とによって、社会的行動獲得のメカニズムを解明し、モデリングの効果を規定する要因を検討しようとした。数々の実験的研究を重ねることによって、仮説を検証し得たとともに、この研究における独自の考え方を実証した。これは、幼児の社会的行動の形成の理解を一步推し進めただけでなく、モデリングの効果に対する一つの新しい説明を提供したといえる。この点で、本論文は、理論的にも、実践的にも、きわめて有意義であるといえよう。

もちろん、たとえば、社会的行動という広い行動をとりあげながら、ジャンケンと積木製作しか取り上げられていないとか、被験児の数が十分でないとか、基本的概念の規定が必ずしも十分でないというような問題点も指摘される。さらに、模倣を促進する条件についての検討の不足なども問題にされよう。しかし、これらの点は、モデリング研究領域における今後の課題であり、この論文に、それまでを要求することは酷といわざるを得ない。今後に期待することにした。

しかし、これらの問題点を差し引いたとしても、本論文は尚十分価値あるものと認められる。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。